

〔一話一言 三十九〕畝問池答南畝問、輪池答、

問、古は日に三度づ、食事いたし候哉、軍中には夜食なしと承候いかゞ、莊子に菘蒼にゆく者は三殮して足るといへば、かの方にても、一日に三度に候哉、此方の古書にて御考等無之候哉、答、西土の故實はいまだ考す、皇朝にては治亂の差別なく、さだまれる食事は、上一人より下万民まで一日に二度なり、その證は天子大床子御膳内膳司の膳供する所の二度也、略註、此外に朝餉の御膳女房の御供仕三度めし上らることあり、これは内々の事ゆへなるべし、略註、武家の式もさぞ有けん、御當家にも朝夕は御汁添御菜數もあり、御三度めは御汁も添す、御菜數も少なし、又永夜には御四度めもあれども、猶更事ぞぎたるさまなり、享保の御時は、昔のためしを思召けるにや、御三度めは召上られざりし也、今も田舎にて節供には二度朝五時夕七時食する所あり、兒玉郡の風俗、常は三度なり、夜には夜長といひて食することあり、此朝夕二度の外はみな臨時に設くる意なるべし、武家にて二合半二度を一人扶持といふも、古きさだめなるべし、

〔嬉遊笑覽十食上〕武家にて晝飯くふこと昔はなし、其も動きはたらく者はくひしなり、今昔物語などに、晝の養は往々見えたれど、夕飯は見えず、これ又多く二食なるにや、籠耳草子に、侍は中食といひ、町人はひるめし、寺がたには點心、道中はたごやにては晝息みといひ、農人は勤隨、御所方にては女中のことばには御供御といふ、これをあやまりておこゝと云はわるしといへれど、さばかりにも非ず、きのふはけふの物語、ゑんりやくじの小ぼうし、御とき過て山へ木葉かきに行とて、ちごのちうじきをせんだなにあげをき、其下に小ぼうしがひるめしもおきて云々、小法師ばら山へ行さま、おちごさまこゝに御ひるが御座る、丸をうつたらばきこしめせと申云々、

〔瓦礫雜考 二〕飯

節信又按するに、いにしへより朝食 夕食あさげゆふげといひて、ひるげといふこと聞えず、中飯は後世の